

英国の高等教育とステューデンティフィケーション

— 教育学と都市地理学の接点を探る —

中澤 高志

(明治大学)

1. ステューデンティフィケーションとは何か

ステューデンティフィケーション（以下、「S-cation」と記す）は、イギリスの都市地理学者ダレン・スミスによる造語であり、高等教育の拡大に伴う学生人口の増大と特定地区への集中がもたらす都市の社会的、経済的、文化的、空間的変容を意味する（Smith 2002; Smith 2005）。S-cationの端緒は、1980年代後半からのイギリスの高等教育拡充政策にある。こうした政策は多くの国に共通するが、イギリスでは中間階級と労働者階級の間に歴然とした学歴差が存在するため、格差是正策の意味合いも大きかった。1990年代後半には、大学が立地する都市において、急増した学生の住居をめぐる問題や、学生と学生以外の住民との軋轢が顕在化してきた。

S-cation発生背景には、大学の姿勢の変化もある。イギリスでは、従来、大学の授業料は原則無料であり、大学の運営費は主に公費で賄われていた。大学進学率が上昇するにつれ、政府の財政負担が膨れ上がったため、公費負担が削減された。それを補うべく1998年には授業料の徴収が始まり、その後段階的かつ急速に引き上げられてきた。大学は運営費を求めて起業家的に振る舞うようになり、授業料収入の増加を目論んでより多くの学生を集めようとした。その結果、1990年代後半からの約20年間に、高等教育機関の在籍学生数は54万人、率にして30%以上増加した。

S-cationは、大学のキャンパス付近の家族向け住宅がHMOs（House of Multiple Occupations）と呼ばれる学生がシェアする賃貸住宅へと変換し、定着性の強い家族世帯が流動性の高い学生人口に置き換わっていく現象として発現した。イギリスでは、初年次の学生は寮に入って共同生活を行う伝統があるが、大学による寮の供給は学生の急増に追い付かなかった。学生の住宅に関する国や自治体の積極的対応はなく、学生の住宅需要は民間の賃貸住宅セクターにはけ口を求めた。

大学の郊外化が進んだ日本とは異なり、イギリスの大学の多くは都市中心部に残存し続けている。政府から払い下げられたかつての社会住宅を含め、キャンパスの周辺には低所得者の居住する近隣が位置していることが多い。S-cationが顕在化したのは、まさにこうした地区であった。学生数の増加を背景に、その需要を当て込んだ住宅の売買が活発化すると、当然のごとく都市中心部の地代は上昇した。こうしてS-cationは、地代負担力の低い低所得者の直接的・間接的な立ち退きという、ジェントリフィケーションと似た結果をもたらしたのである。

家族世帯から学生世帯への置き換わりは、地代の上昇という経済的要因のみによるものではない。学生は、近隣の迷惑を顧みず深夜に及ぶどんちゃん騒ぎをし、酔って路上に粗相をすることもたびたびである。なじみの店やパブは、次第にコンビニエンスストアやファストフード店などに置き換わっていく。ジャンクフードの容器や包装紙、空き缶などのポイ捨てが目に見えて増え、路上駐車が住民の通行を妨げるようになる。利潤第一の大家は極力メンテナンスを避けようとするから、建物は古ぼけ、荒れ放題の庭には不要となった粗大ごみが打ち捨てられる。学生が入替わる季節になると、軒並み掲げられる「入居者募集」の看板が美観を損ねる。こうした変化に嫌気がさして、近隣を去る住民が増え、主を失った家族向け住宅が新たな学生向けHMOsを供給する結果となる。さらに学生人口の割合が高まると、保育所や学校が閉鎖され、公共の交通やサービス、商店の営業などが、大学の学年歴に準拠するようになる。近隣は家族世帯にとってますます住みにくい場所となり、住民の脱出が進んで近隣の学生地区化が加速度的に進む(Hubbard 2008)。

国や自治体は、これを傍観していたわけではない。先進的な自治体は、学生人口あるいは学生世帯の割合に閾値を設け、それを超える近隣では、新たな学生向けHMOsの供給を制限しようとした(Hubbard 2008)。国政レベルでも。イングランドとウェールズにおいて2004年に住宅法が改正され、HMOsが細かく定義づけられ、3階建て以上で物件に同居(つまりシェア)している人数が5人以上のHMOsは、自治体の許可を受けることが必要になった(Smith 2008)。

しかし、住宅法改正は、期待されたほどの成果を上げることができなかった。まず、大多数のHMOsは規模が小さく、規制の網にかからなかった。より厳格にHMOsを管理するため、労働党政権は2010年4月に3人以上6人以下でシェアするHMOsについても、住宅などからの用途変更には自治体の許可を必要とする法改正を行った。ところが労働党は、直後の5月の総選挙で敗北を喫して政権を失い、保守党と自由民主党の連立政権が発足する。規制緩和を是とする連立政権は、早々と労働党の法改正を白紙撤回し、住宅などからHMOsへの用途変更を許可なしで認めるとした。対S-cation政策は、規制緩和を進めつつも、無秩序な都市開発を規制しようとする労働党と、市場原理に忠実な新自由主義的都市開発を唱道する保守党との理念が衝突する場でもあった。

2. 学生は未来のジェントリファイアーなのか？

S-cationは、Smith (2005) によって、ジェントリフィケーションの一類型あるいは類似した現象として見出された。ジェントリフィケーションとは、主として大都市のインナーシティにおいて、労働者階級が卓越していた近隣に中間階級が流入し、既存の建築物のリノベーションや近隣の再開発によって居住空間の改善がなされる現象である(藤塚 2017)。この過程は、住宅価格や賃料の高騰とともに、近隣の雰囲気や景観の変容を引き起こし、低所得者や社会的弱者の直接的・間接的立ち退きを引き起こす。

スミスは、家族世帯の立ち退きといったS-cationが引き起こす負の側面に着目するよりも、S-cationが発生している空間において、学生が中間階級としてのハビトゥス(思考、行動、嗜好など

の様式)を身に着け、ジェントリフィケーションの担い手(ジェントリファイアー)になっていくことを想定して議論を展開した。その着想の発端には、中間階級のアイデンティティ形成の過程において、「学生の空間」とそこでの経験が持つ意味の重要性を明らかにしたChatterton (1999)が位置している。「学生の空間」とは、キャンパスや住居だけではなく、学生向けの商店やレストラン、パブやクラブなど、学生生活と密接にかかわる環境の総体を指す。Chatterton (1999)は、イギリスにおける「伝統的學生」(白人、10歳代後半で入学、家族的背景としての中間階級、親元を離れている)にあえて対象を絞り込み、そのエスノグラフィーを描く。

「伝統的學生」の典型的な居住歴は、大学入学に伴って親元を離れ、初年次は好悪の情が相半ばする寮生活を送り、2年次以降は気の合った友人とHMOsなどをシェアするというものである。住居とキャンパス、そしてそれを取り巻いて展開する「学生の空間」は、学生らしい逸脱や武勇伝を含む生きられた経験を通じて、「正統な」學生の生活様式が体得される空間である。そしてその経験は、中間階級が共有すべきハビトゥスの一部を構成する。初年次の學生は、典型的な學生向けのバーやクラブで過ごすことが多いが、学年が進むと次第にそうした場所から遠ざかり、自分の趣味に合った場所を探していく。こうした「脱学習」のプロセスを経て、中間階級にふさわしい、より高度な差異化のスキルを身に付けていくのである。

こうした議論を敷衍し、Smith (2005)は、「学生の空間」を「ジェントリフィケーション製造所」(factory of gentrification)と呼んだ。この表現は、ジェントリファイアーとしてのハビトゥス形成とS-cationとの関係に加え、ジェントリフィケーションを受けた近隣の近くでS-cationが顕在化する傾向があることをも含意する。Smith and Holt (2007)では、學生からジェントリファイアーへの移行がより強調され、學生を「見習いジェントリファイアー」(apprentice gentrifier)と称している。イギリスの大學は都心周辺に残存していることが多いので、學生は必然的に都心周辺に集住することになる。學生は、いわゆる學生街で、仲間に囲まれて暮らしたがる傾向がある。こうした、都心志向と似たもの同志集住志向が、ジェントリファイアーの志向性と類似していることから、學生は未來のジェントリファイアーであるとの仮説が引き出されることになる。

しかし、「ジェントリフィケーション製造所で學生見習いジェントリファイアーが一人前のジェントリファイアーになっていく」というストーリーは、一つの仮説にすぎない。今のところ、ライフコースを追うことで學生とジェントリファイアーとの結びつきを体系的に実証した研究は見当たらない。ライフコースを視野に収めた研究を確立していくことは、S-cation研究のみならず、都市地理学全般にとっても、「新しい教育地理学」¹⁾にとっても重要な課題である。しかし、これまでのS-cation研究の省察を経ずに、スミスの仮説、つまり學生がジェントリファイアーに移行しているか否かを実証することに、筆者はさしたる意義を感じない。

イギリスでは、留學生、自宅生、リカレント教育の學生などが増加し、學生像が多様化している。大學生イコール「伝統的學生」で中間階級予備軍とみなすことは、もはや妥当ではない。學生像が多様化した現状において、學生からジェントリファイアーへという単線的なライフコースを作業仮説として実証研究に臨んでも、大卒者の一部は、広い意味でのジェントリファイアーになるが、ならない人もいるという、検証するまでもない事実を見いだすだけであろう。

ライフコースの視点を導入したS-cation研究が目指すべきは、これまでの研究が「伝統的學生」を暗黙の前提にしてきたという問題点を直視したうえで、現前に展開する學生生活と學生たちのその後のライフコースの多様性を、社会と空間の両側面から把握することにある、と筆者は考える。異なるタイプの學生たちは、「學生の空間」をどのように異なって認知し、経験し、記憶していくのか。そのことは、彼／彼女らのライフコースに何をもちたらし、生活様式や居住地、職業キャリアに対する志向の形成とどうかかわっているのかを問うのである。

「伝統的學生」を相対化したうえで、なおかつ「伝統的學生」がジェントリファイアーとしてのライフコースをとりわけ志向する傾向があることが見出されたならば、そのことには大きな意義がある。なぜなら、高等教育のすそ野が広がってもなお、「伝統的學生」を経験した中間階級による社会階層の再生産あるいは固定化が、ジェントリフィケーションという都市の特定の場所で起こる地理的現象と密接にかかわって行われていることが明らかになるからである。次章で取り上げる自宅生に関する研究は、「伝統的學生」を相対化するうえでの鏡の役割を果たす。

3. 周縁化される自宅生

一連の高等教育の門戸拡大に伴って、イギリスでは、生活費を節約するために地元の大学に親元から通学する學生が増加している。自宅生は、1992年以降に大学格を得た新設大学に多く、ケンブリッジやオックスフォードにはほとんどいない。いまではイギリスでもアルバイトをする學生が増えてきているが、自宅生の就業率は「伝統的學生」よりも高い。これは、親が低所得であるなど、経済的な必要性が高いためであり、なかには家計に貢献することを求められている自宅生もいるという(Christie 2007)。

イギリスでは、「伝統的學生」であることに対して、依然として象徴的な価値が与えられている。とりわけ親元を離れることは、十全な學生生活にとって必須の条件と考えられている(Holdsworth 2009)。「伝統的學生」が中間階級のハビトゥスの下地を整えつつあるのを横目で見ながら、自宅生は學生として「何か重要なことを経験し損ねている」という喪失感を味わうことになる(Holdsworth 2006)。自宅生として経験する學生生活は不完全で非典型的なもの、二次的なものであるという認識が、当の自宅生を含めて社会に共有されていることにより、自宅生は周縁化される。

自宅生は、地元住民にも學生にもなりきることができず、アイデンティティの危機にも直面する。Holdsworth (2009) が紹介している、「學生の空間」と地元住民の空間を行き来する女性の自宅生の事例は、こうした板挟みを鮮烈に示す。キャンパスを中心とする「學生の空間」に順応するためには、やはり學生らしいでたちが求められる。しかし、彼女の自宅がある労働者階級の近隣では、大学生らしい服装は浮いてしまうし揶揄の対象ともなりうる。そこで彼女は、通学途中で服を着替えて大学生らしく変身し、帰ってくる時には近隣になじむ身なりに戻っている。この女性は、「學生の空間」においても、地元においても周縁化されているのである。

イギリスにおける自宅生の経験については、次第に知見が集まりつつあるが、S-cation研究とは必ずしも有機的に接合されていない。そうした不整合の要因は、S-cation研究の主流が、S-

cationとジェントリフィケーション、学生とジェントリファイアの結びつきを、暗黙の前提としてきたことにある。そのことは、「伝統的學生」とそのライフコースの象徴的価値を維持・強化するとともに、自宅生の周縁化に手を貸すことにつながりかねない。高等教育の一般化による学生数の増加は、「学生の空間」を拡大させ、他の都市空間からの弁別性を高めた。しかし、自宅生の増加をもたらしたのもまた、高等教育の一般化による学生数の増加という同じ要因なのであり、両者がコインの両面をなすことを忘れてはならない。常にジェントリフィケーションとの関係を意識する思考回路から自由に、拡大と変転のただなかにある「学生の空間」において、自宅生を含めたさまざまな属性を持つ学生が何をいかに経験し、それが彼／彼女らのアイデンティティ形成や周縁化とどうかかわっているのかを問うことによって、S-cation研究は新たな発展の契機を得るであろう。

1 本稿では詳述できないが、容器と認識されてきた「教育の空間」を関係性として捉え返そうとする「新しい教育地理学」が、イギリスを中心に展開している。3で紹介する論文は、その流れに位置する。

【引用・参考文献】

中澤高志、2017「ステューデンティフィケーションとは何か——論点の整理と日本の都市地理学研究への示唆」『都市地理学』12：33-49。

藤塚吉浩、2017『ジェントリフィケーション』古今書院。

*

Chattertor, P. 1999. University students and city centres – the formation of exclusive geographies: The case of Bristol, UK. *Geoforum*, 30: 117-133.

Christie, H. 2007. Higher education and spatial immobility: Non-traditional students and living at home. *Environment and Planning A*, 39: 2445-2463.

Holdsworth, C. 2006. 'Don't you think you're missing out, living at home?' Student experiences and residential transitions. *Sociological Review*, 54: 495-519.

Holdsworth, C. 2009. 'Going away to uni': Mobility, modernity, and independence of English higher education students. *Environment and Planning A*, 41: 1849-1864.

Hubbard, P. 2008. Regulating the social impacts of studentification: A Loughborough case study. *Environment and Planning A*, 40: 323-341.

Nakazawa, T. 2017. Expanding the scope of studentification studies. *Geography Compass* 11 (1) : e12300.

Nakazawa, T. 2020. Studentification. In: Kobayashi, A. ed., *International Encyclopedia of Human Geography*, 2nd ed. vol. 13, Elsevier: 105-109.

Smith, D. P. 2002. Patterns and processes of studentification in Leeds. *Regional Review*, 12 (1) : 14-16.

Smith, D. P. 2005. Studentification: The gentrification factory? In Atkinson, R. and Bridge, G. eds. *Gentrification in global context: The new urban cosmopolitanism*, London: Routledge: 72-89.

Smith, D. P. 2008. The politics of studentification and 'unbalanced' urban populations: Lessons for gen-

trification and sustainable communities. *Urban Studies*, 45: 2541-2564.

Smith, D. P. and Holt, H. 2007. Studentification and 'apprentice' gentrifiers within Britain's provincial towns and cities: Extending the meaning of gentrification. *Environment and Planning A*, 39: 142-161.

[付記] 紙幅の都合により、議論や文献を省略した。詳細は中澤 (2017) および Nakazawa (2017, 2020) を参照されたい。